
 学 会 記 事

 新潟大学医学部精神医学教室
 同窓会集談会

日 時 昭和63年12月10日(土)
 午後1時より
 会 場 新潟大学有任記念館

一 般 演 題

1) 妄想形成と夫婦関係

塚田 祐之・七里 佳代 (新潟大学精神科)
 長谷川まこと

精神分裂病の幻覚・妄想の形成に、配偶者が関与しているのではないかと考えられる症例に対して、別々にロールシャッハを行い考察した。

症例. 初診時38歳の女性. 専業主婦.

生活史. 高校卒業後、26歳で結婚するまで職を転々と変えた。また、何人もの男性と次々に交際していたので、夫は、こんな自堕落な生活をしてはいけぬ、とプロポーズし、結婚した。第二子出産後から現在まで、7年間、夫婦生活はなく、それに対して患者は、特に不満はないと言う。主婦としての機能は、38歳まで果たしていた。

病歴 20代初め頃から心氣的傾向が出没し、20代後半から被害的傾向が生じる。夫は妻の病的な訴えに対して慰めたり、支持的に接していた。38歳で、前から好きだったニューミュージックの歌手のコンサートの最中に、その歌手の声の幻聴が生じ、自分がその歌手の妻だという妄想に発展した。姉に伴われ当科受診し、精神分裂病と診断されて治療を受けた。通院を中断し、初診後4カ月にて当科入院。入院後、「私はその歌手の妻です」と主張していた。夫は、当初からつきそい、熱心に看護をしていたが、精神分裂病の可能性が高いという説明に対しても、事態の重要性がさほど感じられない様子であり、その点、奇妙に思える程であった。スルピリド投与により、比較的簡単に幻覚・妄想は消失し、退院となった。

考案 症例の心理検査の結果は、病相期では思考過程の障害がみられ、分裂病水準であった。寛解期には精神内界の貧困を示し、破爪型に近いデータであった。夫の心理検査の特徴は、男性同一化が不十分であり、依存欲求が強いことで、病態水準としては神経症レベル以上といえた。若い頃から病的な訴えをする妻を、病人とみな

さず弱者とみても、庇護する事によって、夫は自己の依存欲求を代償的に満たし、男としてのプライドを守っていたと考えられる。症例が、破爪型に近い心理検査データでありながら、30代後半まで明瞭な破綻を免れていたのは、夫のそのような心理的特質の為と考えられる。

さてこのように、社会的には問題が表面化しないで経過していた症例が、38歳になってから幻想・妄想状態を呈した理由を考えてみる。まず、若い頃の妻の病的訴えを、病的にとらえられなかった夫の為に、医療機関の受診が遅れた事が一つ。次に考えられるのは、夫は男性同一性が不十分な為に、妻に弱い男性像しか与えられず、妻はしだいに別の男性像を求めようになったのではないかということである。しかし、現実生活では結婚しているのに新しい結婚対象を獲得しがたく、内面の葛藤が増加していく。そこにニューミュージックの歌手という刺激が加わって、幻覚妄想の形成へと促したと考えられる。精神療法的には、妄想の対象とならないよう留意して、夫の与えられない人間像を与えてみた。

2) 幻覚妄想状態を呈した老年女性の1例

幸村 尚史・佐藤 新 (新潟大学精神科)
 佐藤 哲哉

老年期に精神障害をきたして、精神科の外来を訪れる患者の数は多い。今後、高齢化社会がすすむにつれ、老年期の患者は増加するであろう。今回、我々はせん妄や著明な痴呆を伴わず、85歳時に発症し、幻覚妄想状態を呈した case を経験したのでその症例を紹介し、若干の考察を加えて発表した。

症例は初診時86歳の女性Aである。精神障害、高血圧、脳血管障害を疑わせる遺伝歴は認められない。20歳頃より服用すると頭がスッキリするからといって解熱鎮痛剤を常用していた。(既往歴)「医者嫌い」で歯医者以外にはかかったことが殆ど無いという。(生活史)父親は化粧品等の行商をしていたが、患者が15歳の時に死亡したためそれ以降はAが一家を支えていた。18歳で結婚したが、夫があまり働かなかったため、まもなく離婚し、24歳頃再婚している。72歳頃まで父の後を継ぎセールスをやっていたが、その後は店番をしながら趣味の編物やテレビを見て一日過ごしていた。現在、長男夫婦との3人暮らしである。(病前性格)内向的で交際をあまり好まないが、気の強いほうである。(現病歴)86才の秋頃から、隣家からレコードの音がする、貫一お宮の歌が聞こえると語り始めた。隣家に意地悪されていると言って抗議に行くこともあった。このため翌年2月某耳鼻科を受